

歌集『あかね雲』より（九）

登美子

中程で振り返り見れば七坂の

曲がりし谷は空き色ふかし

黒き顔鏡に向かいて良く見れば

皺の多きに驚きしており

足踏みのミシンの音は

耳にあり三十年過ぎし母の命日

静岡茶と共に貰いし湯呑椀

健康五訓の筆太にあり

真赤なる薔薇の散りゆく様見つ

われも余生を清く生きぬと

子のくれし健康五訓の湯呑には

腹八分目と運動減塩快眠とあり

友逝きてほほけるわれに付き合いて

一日鳴らざる風鈴見上ぐる

誕生日過ぎて年金医療費と

俄に変わり身の縮むごと

鈴ならし四つの仔猫のたわむれる

若葉の茂る陽だまりの庭

行きの日には伊吹の奥を訪ね来て

歌の師囲み岩名喰いおり

軒簾のきすだれ遊ばせながら巡る風

遮るものなきがらんだうの家

七曲り坂超えて奥伊吹に

シオりにせんと紅き葉拾う

一枚の羽根の痛みし黒揚羽

少し小さき蝶寄り添いて行く